

毛夷東環記 (三) (止)

浪川健治

家居

家^{チセ}ハ貴賤となく、大方式間乃至式間半四方也、柱は打割にし、軒の高さ四尺位に過す、四壁^{弘・七・ハ・をなく}とハ屋^ハ柵とは草を聚て是を葺き、四方の壁際へ土居の如く高さ二尺位土を寄せて寒氣を防く備とす、入口三尺計り、本朝麴室の如く小き廻戸あり、打割の板を鯨の鱗にて綴付る、是をアバと云、入口「汚損」より低く曲り屋を立、此内へ薪を入置く、いろりの「汚損」へイナヲとて本朝削り懸と云物に似たり、是を立て火の神を祭るとなり、煙出しあり、フヤリと云、是より明りを取、甚た明らかにして障子にまされり、又煙よく抜て煙る事なし、易曰、上古穴居野処、聖人易之以宮室上棟下宇、以待風雨

婚姻

婚姻の事、出生否、夫妻の約をなし、盛長に随ひ自ら婚をなすと云へり、又一説、婚を約するの後、媒妁、夜中密に女を連れ来り、夫なる者に授けて帰る、此事至極隱蜜にして、父母兄弟の知らざるを吉とし、此事推せ

られ、又知るゝを不吉とすとなり、翌朝に至り、嫁、其家にある時、父母、是を見て大に悦び、則朝、姑より嫁へ杓子を渡す、是薪炊の事をして今日より嫁へ渡すと云事なりとぞ

喪

夷人死するの時、親屬郷党打寄、其哀哭する事甚た哀し、終に臥たる俣筵へ包、横さまに土葬す、平日彼か持し器物、是又捨る也、没後供膳・供仏・作善等の事、一切なし、只親屬六・七日か間ハ昼夜哀哭して其財器を他へ賦り、家を焼捨る、是、死せし者をして今日より忘るゝ事也と云、夏ハ菟もあれ雪中ハ此家を移すに雪の上へ柱を立、四壁をなすへき筵や草もなけれハ、檜・追子など常盤木の枝葉を以て屋を覆ひ、四方を囲ミ、雪の上へキナといふものなり物を敷、雪消までの間、此所に居る、夷狄の習しとは云ながら無慙なる事とも也、是より死者の事を絶て云ものなし、若誤て云ものあれハツクナイを取とぞ、又吊打とて親屬、又は郷党打寄、其子を打事数多なり、絶死すれば水を懸け、蘇生を待て又打ツ、如此する事ハ死者の事を忘れさすへき為也とぞ、公儀より

教を施し給ひて、近來はケ様の事を堅く制し給ふ故、稍止むと言へとも、
官舎に遠き所は未だ其事ありとなり

船

船といふ、打割の板を削り、エゾ繩といふ物にて綴付る、帆はキナを横
に張り、エゾ地一統車械を用ゆ、船は源廷尉義経の教給ひしと夷狄の伝
説なり、さも有へきにや、吾藩の海辺皆同じく車械也、この車械、左右
にて是を使ひ、舟を早めんとする時、水主を増し是を押す時、其早き事、
飛鳥の如く、進退又自在なり、是彼の梶原、大物の浦にて論せし逆櫓と
いふ物なるよし、いつれ舟は廷尉渡海以来の事なるへし、易曰、黄帝剡
木為船、剡木為楫、舟楫之利、以濟不通、致遠、以利天下
、又吾朝、神代、天之盤機樟船アリ

弓矢

弓といふは木を丸く削り弦クカを懸、矢といふハ楸を能程に削り、中を竹
の如くうつろにす、其真を拔事、伝あり、甚た造作なき也、易曰、黃
帝弦木為弧、剡木為矢、弧矢之利、以威天下ト云、是又吾朝神代既に
天の鹿兒弓・天の羽々矢あり、矢の根は骨を沢瀉形に削り、是を矢の筈
へ入込め、空穗の如き物の底に毒薬を入れ、其上へ挿し置く、是獸を見
懸て射る時、手間とらぬ仕懸けなり、羽は本朝の如くはかすして、羽式
枚を両方より附る故、四ツ羽となる、詩曰、四牡翼翼象弭魚服、注

二弓交未斃以象骨為之、云々、列女伝曰、晋平公使工為弓、其妻見
公曰、妾之造此弓已勞矣、幹生泰山之阿、伝以燕牛之角、是往
古、鏃に角を用ひし事、明かなり、神代卷、口決二羽々矢ハ作二羽矢
也、又太神宮宝の矢も二羽なれハ古の制法ならんと有ハ、今蝦夷の用る
処の弓矢は、則ち太古の制ならんか

劍

劍あり太刀をタン子フ、形ち、本朝衛府の太刀を摸して惣銀拵也、然と
も皆銀を着たる物にして甚た薄く、至極の龜物也、刀も鈍刀にして用る
に足らずと云へとも、夷、甚た重器とし貴なり、按するに、是皆、彼
阿部やなる者運上せし時、帝都坂陽の工人江直に作らせ、夷狄を欺き
利せしものなるへし、只此劍のミに限らず本朝より渡る所の品を
以、重器とす、是を貴ふ事、甚た至愚に似たり、併人情、異物を貴ふ事、
世界一統なれハ敢て夷のミ愚なりと賤むへき事二あらず、吾朝、近來に
至り別て異物を貴ひ、外国渡來の品は精粗善惡といわす是を賞し、是を
玩ふ、若外国の人に是を見せたらハ、又吾れ夷狄を笑ふの譏りあらんか、
神代、天瓊矛あり、又十握劍あり、篁子曰、葛天廬之山發而出金、
蚩尤受之制之以劍鎧云々、倭漢、劍を貴ふ事、久ひかな

玉

女夷、玉を繫きて頭と腕とに纏ふて無上の美飾とす、本朝の婦人、頭に

高金の櫛笄し、身に綾羅錦繡を服せるとひとし、都て夷の宝物と称する物、第一劔・玉也、玉は唐太嶋より渡る所の青玉也、其外行器、大食籠、湯桶、膳、椀、盞、同く台、都て金・銀を鏤め蒔画したる器物を貴ひ、多く貯へたる者をハ富貴也とす、日本記曰、素戔鳴尊、乞取天照太神警覺及腕所纏八坂瓊之五百箇御統、荀子ニ処女嬰宝珠とあればハ、婦人の玉を嬰る事、和漢の古風なるへし

鯨

女夷、口の辺りと腕に鯨する事、源延尉、蝦夷か嶋へ渡海し給ひし時、甲冑を着給ふ、其籠手甚美とし其形を写したる也、其模様、いかさま籠手に似たり、又説には開闢の古へ夷穴居して漁獵の事を知す、食に乏しかりしに、男女の神あり、昼は見ゆる事なく、夜に入れハ必ず窓より魚を投入、是を食ふて漸々命を全する事を得たり、其形を見んとするに殆ど見る事能ハす、或時、彼神、魚を投給ふ時、其手を見れハ鯨せり、夫より其神形に似せて鯨すとなり、又一説に、舟と漁との道行れざる已前は、夷共只海へ潜りて魚を取しに龍蛇・惡魚の害に遭事多し、故に鯨して海へ入るに、其形怖しければ惡魚近付事を得ず、難をのかる、事を得たりと老夷の伝説区也

国初

此篇は東北ヲロシヤの方より開け、西南日本へ近き方ハ後に開けたりと

蝦夷の伝説なり、さる事も有にや、東北の奥シベトロといふはウルツフ崙への渡津なり、殊に此崙の夷言、松前・クナシリの夷言と違ひ、過半はヲロシヤ言雜れりと也、シベトロのあその中、家内残らず先年ヲロシヤの属崙へ行き、三・四年住居して彼嶋にて子を儲けて後帰崙せし蝦夷今にありて、ヲロシヤへは甚た近しとなり、海岸高き処には穴居の跡也とて、大概三・四間四方の穴、所々に有、如何さま久鋪跡と見へて、穴の中へ草木を生し、穴と見へす、地の窪かと見る程也、所により其下絶壁にして半里、或は其余も行されハ海へ下りて漁すへき通路なき場所あり、又川に寄ねは水の手も見へす、いか、して水を汲ミ、魚を得しにや、此穴中を穿れハ陶の欠夥しく出るといへとも、其全形の物を得ず、其性、吾朝備前焼の徳利或は擲鉢などの如く高く、異風の文ありて甚た古雅也、其欠、寸々に碎けて手に取へき物なし、鍋とし用たりしにや、エソもその事を知すと云、是、倭の器にもあらず、エトロフにて出来たる器物にもあるへからず、ヲロシヤより渡りたる物か、不審、文化二年、シヤナといふ所へ勤番所を取建し節、地形を平均せしに、足輕の中、長サ貳寸計の金の仏像を得たりしかハ、是全く黄金にて造れる仏ならんとて秘藏し持たりしに、此事、終に会所へ聞へ取上られ、其代として金百疋給ひしと也、後、我、此事を聞、其節勤居たりし関谷茂八郎なるものに調役なり、尋しに、其仏は全く黄金にはあらず、彼切支丹の念する仏にしてヲロシヤの物也、此嶋の夷とも間々持居たりしを皆取上て江都の闕所藏へ納めたりしと語りし、其翌文化三年、予か勤中、土中より古鍋一枚を穿し者あり、鉄也、其形ち、江都の鍋の如く蓋か、へ有、其蓋か、への内に鈎懸あり、縄を鈎にしても焼さる如くせり、其さま如何にも古く、

朽て底なく、外の方に絵釜の如く文ある如し、是、全く倭物にあらず、ヲロシヤの物なるへし

霧

蝦夷の地には惣して雲霧深く、舟に乗るものハ別て是を苦む、雪消(雪消北)の時より雲霧起り、入梅に入てハ別て厚く、朦朧として咫尺の間も分けかたく、六月土用頃まで天日を見る事、甚た稀也、土用過て晴渡り、秋八月は別て天氣清明也、此霧の事を松前にてハヂリと云、夷は是をウラリと云、此雲霧お、ふの日は小雨降如く、衣服もしめやかに氣心鬱結して何となく不快なり、クナシリは別て雲霧深しとなり、エトロフも西海は晴れ、東海は甚た深しとなり、説又曰、霧者百邪之氣為陰冒陽、本(本ノイテ)于地而行(行ハル)于天也、是則山沢瘴癘ノ氣ニシテ和人病を生ずるの元なり、此邪氣を貯へたる上へ、又冬に至り寒邪骨髓に入る、豈生くるの理あらんや、夷も此氣を甚た憎む、生れなから其氣中に育つ者も、正・二月、嚴寒の節は死亡する蝦夷多し、神代卷曰、一ノ神共生(共生ニシテ)大八洲国、然後伊弉諾尊曰、吾所生之國、唯有朝霧而薰滿哉、乃吹揆之氣化為神、云々、然れハ上古は何國も霧深きものにや

食犬

蝦夷、好て犬を食ふ、家々牝犬を養ひ、牡犬は一郷三・四疋を飼ひ置、來歳子を産するの種とし、子は當歳の内是を食す、多く産するものハ十

匹余其余に至る、十月後、寒氣なれハ時々是を殺して葉餌とす、客あれハ是を供て饗応す、皆當歳の内喰尽す也、毎歲如斯、肉は美味なるのミにあらず、能寒を防ぐの徳有となり、皮は生にて腥き内に縫て裘とし是を着る、寔に禽獸なり、上古は吾朝も犬も食せしにや、往古牛馬の肉を食する事を禁止し給ふ事、日本記に見へたれハ、犬は猶更食したるへし、吾藩隣秋田領は當時とても四民共に犬を賞味するよし、皮服するの蜚夷、豈犬を喰ふ事を憚らんや、其犬を殺すに蔵の床の下へ、トナリいふ皮の細引の如きをわなとして犬の首を入れ、足を引てくり殺す、声を揚る事もなくて死する也、異朝、鶏を射るに似たり

酒宴

老少男女となく酒を嗜む事甚たし、清酒をカモイ酒(カモイ酒)と号し、濁酒をヌンバサケ、又チカラサケとも呼也、清酒は渡來の物なれハ恣に吞事能ハす、稀に飲のミ、会所には各麴を廻し置故魚物と麴と交易し、女夷、是を釀す、又米を交へて食とし、苞に入て砂中へ埋ミおけハ麴となる、倭人、是を制するに全く麴とならず、夷、新宅移住徒等の事あれハ濁酒を釀して親屬郷党を招て是を飲しむ、是をラムシヤと云、和人の振舞なり、此時、彼宝物を出し飾り置也、客を請するの礼、先ツ客來る時、主人戸の外まで出、手を引て内へ入る、客座につかしむ事、甚た慇懃にして慎めり、客、服を改め各平常と異也、其服をカダビラといふ、ヲロシヤの服有、夷の製したる有、又倭の服あり、何れにも美しきを貴ふ、座次はヲツトナ、上座たり、コゾカイ、是に次く、是より次第によつて両辺に列

器

夷狄の業に出来る処の器は、船チツフ、弓ク、矢アイ、水桶カモ、
櫓チシマ、敷座キナ、柄杓カックム、マドンキウツス器、イダ
盆也、煙管セレンボ、ズイノ木ニ云等の数品に過す、其外日々用る処
の鍋ナベ、シユ、鑼マサカリ、山刀ナタ、カナマダ、鎌ユツテ、刀タン子フ、鑢バウラツフ、
提ヒサゲエド子ヒ、櫛キライ、藥罐カバラシユ、木綿衣裳カンガキ、木綿チメツ
フ等は皆倭物を用るなり

産物

本朝へ交易する処の産（弘・北第一の産は）、第一は鱒シヤケベなり又エチヤニ（弘・北郡）とも、毎歳六月上旬頃
より出て七月に至り盛んに則月下旬まで漁す、川々多く有とも、ナイホ、
ライト（弘・北フレベツ）、フラシヘツ（弘・北郡）、ラウシ、ルベツ（弘・北郡）、アリムイ（弘・北郡）、シヤナ（弘・北郡）、ベトウ（弘・北郡）、ラ
トイマウシ（弘・北郡）、シベトロ（弘・北郡）、此数ヶ所より出づ、倭人の番人と云もの、日々
に先き働をし其場所限りの男女、十四歳より六十歳位までの夷を集めて
網を引、大釜を建て、昼夜魚を煮る、能煮たる時、肉を締台へすぐい揚
て是を絞り、膏を取て魚油とす、シユム（弘・北郡）といふ、其粕を（弘・北郡）シラリハ乾して
はしかと号し、両つながら本朝へ運送す、七月初旬、其魚の盛んになれ
ハ海岸一・二丁か程水面一円に魚浮ひ、石を投るに水へ落ず、魚へ当り、
石踊て幾つても当り、力尽て海へ入る、甚た敷節は船を漕に械梶へ魚障
り、船の働き自在ならずといへり、又川の中には魚、水面に顕れすとい
へとも、浅き所へ入、たわむれに刀を以て水面を剪に、一刀式・三本乃

座して安座す、主客、挨拶（弘・北郡）して酒は行器・大食籠等へ一盃にいれ、残ら
す座中へ出し置、外へ貯へ置事なし、蓋は大底時画したる女碗等也、
是を台へ居へ、碗の中央へイグバシユ（弘・北郡）といふ彫したる笏の如き物を載せ
て出す、銚子ハ湯桶提などにて、酒一色の外、肴といふものなし、主人、
酒をつきてイグバシユを以て碗中の酒を上下四方へ灌き、天地山川海の
神・火の神を祭り、呪文終て右のイグバシユ（弘・北郡）にて髻を分け酒を呑、又此
盃へ酒をもり、イクハシユを元の如く碗の中へ居へうやくしく上客へ
進む、客、是を受けて主人江向ひ礼あり、両手を摺り何か物をいふ事、僧
の経を誦するか如き節あり、主人、合掌して此礼を受る、早て客、又、
天地山川の神明を祭る事、主人の如くして後、是を飲、次客へ譲る、皆
初の礼の如し、末座まで此礼一篇終り乱酒となる、酒酣に及て鶴の舞あ
り、女夷の踊なり、其興、倭人に異る事なし、此酒尽さる内は各家へ帰
ラす幾日にも昼夜となく酒宴す、此時に至てハ如何なる急務あるとも
顧るものなく、終に口論起り、打合・打擲す、絶死に及ぶ者有、此ラム
シヤの時、各めの子を連来る、酒めのこへも呑しむる時、其酒をハ吞真
似して飲す、カモくといふ器へ入れ持帰り、後日、其夫に呑しむる事
也、女夷も甚た酒を嗜といへとも、夫を思ふ厚情、是を以て計るへし、
是をラムシヤともカムイノシ（弘・北郡）ともいふ、又熊の子を得たる時、是を養
ひ置て、十月の頃、漸盛長せし時、此熊を殺して前の如く親属郷党を集
めて酒を振廻ふ事あり、其式少しく異なるといへとも、酒礼ハ前の如し、
故に是を略す、漢書曰、酒者天之美禄、帝王所（弘・北郡）以頤養天下、享祀祈福
扶（弘・北郡）老交（弘・北郡）歎、百福之会、非酒不行、説文曰、酒者造也吉凶所起造也

至六・七本をきる、水中一円魚なるへし、此時、犬、川へ入り、魚をくわへ陸へ上り、振殺して又川へ入、魚を取て戯とす、敢て是を喰ふにもあらず、只衆犬拏て戯とするのミ、其夥敷さま斯の如し、此鱒出てハ夷外の魚を喰ハす、只鱒のミを食とす、又生たる魚の頭の中なる水晶の如き骨と眼玉と眼下の肉と背の通りを切りて、生にて是を食ふ、小兒は漁場へ来り、魚の頭を集め珠数の如くつなき、内へ持行、各是をくろふて樂とす、倭人の菓子を喰ふか如し、老少ともに是を嗜む、此時鮮血手足を染め、口より血流れ咽喉に下る、其さま悪鬼羅剎とも云へし、鱒稍く末になりて鱒アギアジ、シイへとも出る、是又多事、鱒と等といへとも、秋冷陰氣行れ乾き兼る故に、ほしかとする事能ハす、又塩引にもすれとも、八月より末は天氣清明なるとても波濤高く揚り船の足立されハ、即歳の内是を本朝へ運び取事あたハさる故、只割乾してアタチといふ物にして夷是をトバと云、夷の食料に備ふるのミ、少々は塩引とし其年詰合たる倭人の食とするまで也、鱒のはら、夷是をチホロといふハ皆海岸へ捨る故に、海岸は勿論、海底迄も赤くして龍田川の秋を摸す、此寫の中一川より出る所の魚、我藩中にあらましかハ、他国より入処の魚を求めす、四民、魚に足り、又国産とし他所へも出すへし、惜哉、夷域に有事を、次に鯨フンペなり、以前、阿部屋なるもの交易せし頃は多くありて、肉は夷の食とし、油のミ交易しても利潤足れりと也、毎年氷海解るのとき多く海岸へよる、又不時に寄事もありとぞ、今は不足にして一歳三・四本ならて寄らねは産物とするに足らず、只食ひ尽す迄也、クナシリと此寫の間なる海に多くミゆる也、予、文化三寅の年五月下旬、船にて此嶋へ渡りしに、前に記せる兩寫の間遙に是を望むに、しかも其日は海上波

和て鏡の面の如くなりしに、白浪天を浸し、其音雷霆の如し、舟師に是を問ひしに鯨の遊戲する也と、近く成て是を見るに、数百群をなし海上に浮ひて、或は追、或は追ハれ遊び狂ふなり、斯多く有中ち、冬に至り、氷に閉られて死すにや、氷解の節、多く寄る也、次に鯨ヘロキなり、五月に入て漁す、是又夥しき事云へからず、又鯨カバツチリの尾なり、雪降り積りて後、山中へ小屋を懸、中を仕切て二日間とし、一間には鮭を置、外よりミゆる様にして、一間には己か姿を隠し、驚、小屋へ飛入、其魚を食する時、手を出し其足を提取らへるとなり、是甚た難儀なる事にして、倭人の及ふへき事にあらず、又熊ホクユツテの皮也、毒矢を以て是を射る、此寫の産物、本朝へ交易する処の品、右に記す数品に過ず、外に獺有、ウルツプといふ寫より出つ、エトロフの夷、彼寫へ渡りて狩るとなり

山

寫中一四山にして平陸の地なし、山をキシタといふ、其勝れて高キ物をノボリと云、其高山はベレクルヘタン子モイニアリ、タルマヘノボリマ、エニアリ、アツサノボリナイボニアリ、ヒトカフカルシヲタシユツニアリ、ロツコウノボリヲタシユツトヲイトノ、チリツフノボリシヤナニアリ、シベトロノボリシベトロニアリ等の数ヶ山あり、此内チルツフノボリ大山也、アツサノボリは名山也、其形ち富士山の如く面向不背にして、麓に草木あり、頂上兀山にして大沼ありと也、夷もこの頂に登りたるもの古来よりなしと也、周廻七里余の内、六里余は海に入、僅に

一里計陸に続きたれハ、海中に有山の如し、此麓六里余の間、海岸巖崖、美景中々画毫の及ふ処にあらず、トゞ、アサラシ多くミゆる、此辺、本朝に未だ見ざる処の小鳥あつて群飛し夷言カヨリといふ、又ウセシリとも云、形ち千鳥程にして羽毛茶色、嘴白く、足の皮至て赤く、ヲロシヤに多くありとかや、ヲロシヤ人はイトピリカといふとぞ、此皮は甚た美なる故、ヲロシヤ人、此皮を剥きて裘の襟と裾を包ミ、又所々へ下けて裘の飾とすと也

鳥

鳥チガツケハ、鴨コベツチャ、鶯カバツチリ、鴈ダイドツヒ、甚た少し、春秋稀にミゆる、白鳥レダツチリ、鶯ホケキヤウノ訛リカ、海鷗カヒウ、鶴サルシ、鴨コロゴン、鶯ヤツトサ、鶺鴒バエカンチリ、鳥ハシシクロ、此鳥、形ち鶯の如く大にして、声ハ猿の叫ふに似たり、本朝の鳥と異なりエトロフ鳥と云、松前奥子モロ辺より奥にあり、倭鳥・鳶鳥・エトロフ鳥、同名別種なり、鳥類、予か見し処、右に記せる数鳥に過す、只此鳥のミに限らず鳥獸草木魚鱉万物共に品類甚た少しと知るへし、又ゲイくくと云小鳥あり、大サ鶉位にして海上を群飛す、此鳥多くミゆれハ、必ヲロシヤ人来る前兆也といふ、又トベンベラリといふ小鳥あり、甚た燕に似たり、海岸、又は河岸に穴居して群飛す、是等、本朝に未だ見ざるもの也

獸

獸は熊カム井チャ、狼ヲホセカムイ、兎イセボ、獺エシヤマ、犬ダシダ、鼠アリモ等也、熊は倭の熊にあらず、頭も形ちも甚た大にして眼は鳥の目の如く丸し、稀に金毛なるあり、甚た美也、狐チロソッフ、玄狐あり、希品なる故、毛皮高金也、予、此鳶の狐を見るに足の掌に毛を生ず、又夷に是を尋るに人に祟り、又人をたふらかす等の事曾てなく、諸獸に異なる事なしといへり、然れば是狐の類にして倭の狐にあらずか、殊に黒狐と足掌に毛ある獸、未だ本朝に聞ざる処なり、博物者を待て決せん、海獸は水豹トカリ、海獺イタンベ等也、多くあり、夷の食とす、水豹は氷海漸く解る時、山へ登りて是を臨むに、其氷解たる処、江の如く、湖の如く、沼の如く、池の如く、所々に水面顕ハる、此時アサラシの子、氷上に遊ぶ故、夷、是を狩て食とす、四月頃、漸く蒼海となりて風波静なる時、又汀渚へ上りて眠る時、手捉にする事も間々あり、イダンベも多くあり、又ホインと云物あり、山に棲む栗鼠位の獸なり、其皮を多く集めて裘とす

草

草ムニは夷の食する物は、猪口百合、黒百合バロ、ブクシヤ、倭人アイハ、エヂヤリキナ倭言コジヤ等也、倭人の食すべきは蒔ヲログニ、独活チマキナ、筍トツチイ等也、凡て夷は肉のミを専ら食し草は食ふ物少し、葡萄・栗・胡桃の菓は絶てなし、只フウレツフとて蔦漆の如き物へ、南

天の実に似たるもの、赤き実なるあり、味ひ酸くして甘し、又苔の実の如きものあり、只此式種あるのみ、極陰強寒、花、実をなす事能ハさるなるへし、

菌^{キノコ}カルシ、只柳へ生するのみ、其外なし

竹

竹トツチイ、山中一円にあり、皆シヤコタン竹なり、斑黒の文あり、然とも西エソ地より出る処に比すれハ下品にして用るに足らず、落はすくれて太し、丈け五・六尺、太サ八・九寸廻り常にして一尺余廻るものまゝあり、味も又よし、本朝の露に勝れり、前に記すブクシヤといふ草は吾藩のアサツキという物に似たり、甚た臭し、土用の頃、是を取る、乾し貯て冬に至て是を食ふに、能寒を防ぎ腫を消する功有とて夷狄も貴ひ、倭人も是を賞味す、又黒百合の事、本朝になき奇花也とて諸人甚た愛すといへとも、本朝に此花ある事、既に太閤記に見へたり、其色、真の黒きにはあらず、藍の濃き色也、花は至て小さく咲く、釣鐘草の如く下へ傾き咲く、甚た下品にして愛すへき花にあらず、古来より本朝に有とも其花卑き故に、人、賞翫せざりしと見へたり、是を本朝へ移し植へたりしに、三年にして花の黒色変して赤くなりしとぞ、然れハ土地による色なるへし、根は平く丸くして七子也、^{ナ、コ}味ひ、百合にひとし、少し苦みあり、百合は所により夥くあり、一日壺人して壺汁もほるへし

木

木ニト云は唐松グイ、姫松^{ヘイシノケ}ヘ子ケレ、榎^ノヤラニ、櫟^{シケレベニ}シケレベニ、柳シ、ユ、樅^{カラ}レンバ、其外イダヤ・ブナの類あり、唐松は此辺^{（近江）}の諸木に先立ち生したりと見へて老木多し、形ち、曲節して蟠龍の如く、又畳々として車蓋の如く、種々の奇形あり、古雅にして愛すへし、木も又良材にして家木とし用ゆへし、此木、本朝未だあらざる物也逆奇木とすれと、予、是を考に、吾朝にある処の落葉松也、其故は本朝の緑り松計りを見て老ひ朽たる古松を見ざる者、是を見せハ全く松には非ず、別木也と云ハん、此木又然り、山海の風霜に責られ、直ほに盛木する事能ハす、曲節、盤屈して、其肌膚龐く、其木剛く見ゆる故、落葉松にあらずと見違しもの也、只緑り松と老松を見て、其実を知るへし

魚

鮭・鱒、雄は本朝の如し、雌は鼻反り背高くして全く鱒と見へず、別魚と見ゆる、俗、是を鼻バリ鱒と云、鱒^{アイレグシ}六月出る、^{（近江）}茂魚・タラ、^{（近江）}を^{（近江）}見て何魚、王余魚又シヤマベトモ、^{（近江）}鱒コエ、^{（近江）}ギ又コヤンセフ、^{（近江）}アイナメの如きものなり、^{（近江）}鱒、^{（近江）}ソエソエト云、^{（近江）}カチカエビ、^{（近江）}鮎^{（近江）}アトエナ、^{（近江）}蟹アパイヤ、^{（近江）}アメ鱒^{（近江）}間位もありと云、^{（近江）}江豚^{（近江）}ヲゴン、^{（近江）}鯨^{（近江）}フンベ、^{（近江）}チカトツヒカリ、^{（近江）}ヤマベ^{（近江）}ホントクシ、^{（近江）}鰯等也、^{（近江）}川魚はセグロありシユブニと云、^{（近江）}アレコロベと云魚あり、形ちカチカに似たり、頭大也、腹に鰭の狀に似たる有て能岩へ吸付、氷解の頃、岩の間をせ、りて取る、煮て是をくろ

うに骨和かにして、味、串海単と同じ、ヘビヲといふ魚あり、形ちひらめに違ふ事なし、小なるは五・六尺より、大なるは老丈五・六尺に至る、味、甚た美也、是を三枚におろすに、厚き事豆腐の如し、是平目の大なるものか、又チライといふ魚あり、川魚なり、形ち鯉に似て鱗大也、丈ケ五・六尺、味ひ、大魚と云ものに似たり、又カンナカムイといふものあり、小魚なり、形ち、カチカに似たり、両頬の骨尖り、角の如く上へ反りて頬といふ物に似たり、貌の怖しきに似ず骨和らかにして味美也と云、又カモイゼフあり、かづなきと云魚に似たり、其形ち醜悪き也、丈ケ三・四尺、齒は丸くして玉の如く、上下ともに二重に生ず、水晶を植たる如し、前書アカレコロへよりカモイゼフまでの五品、予、未だ見ざる処のもの也、本朝にも此魚ありや知らず、ホヤあり、其色・味ひ、凡て本朝のほやに違ハす、只イボなし、奇とすべし、海藻、喰ふへき物ハ海苔と昆布とコブノリあり、皆倭言の如し、倭人と交易してより海藻を食する事を知りたるや、海藻はアイノの言なし、只倭言の訛れるのミ也、ウルツフといふ昆布あり、芭蕉の如く中に茎あり、是を乾せハ葉は碎けて茎計り残る、中空にして焼て食ふに味ひよし、是未だ本朝にて見当らず

虫

虫キ、甚た少し、予か見し処は蠅カマンバ、蛇チキリ、蜘蛛ヌンクニ、(此等虫は毒あり)風と云、蚤タイギ、是等計り也、蛇、蚯蚓等の地虫は絶てなしと云へり、是地中に陽気少き故ならん、予、三年住居せし内、虫の声を聞ず、全く

人の可棲土にあらず

一、貝セイは食すへき物なし、アツサノボリの岸にて帆立貝の小なるを見、夷に尋しにセイタイセイといふとぞ、食とすやと問へハ、此海深事千尋、得て取べからず、稀に大なるもの、波に打れて寄事あり、是を食ふに甚た味美也と云へり

一、強寒のさまは氷海の処にて推て知るへし、四月中旬、死者の穴を穿せしに深サ三尺位迄は其さま燐石の如し、(此燐石は毒なり)鉄などの及ふ処にあらず、鏞を以すれとも、是又刃減りて終には槌の如くなる

一、花は咲物稀なり、桃・桜は五月開き、浜梨・附子は六月より七月懸て咲く、故に花あれとも実なし

一、倭人、此處に至れハ必ず浮腫を生し、生て帰るもの稀也、其症、初めに二便渋り、足の甲に腫見へ、漸腫へ上り、股へ入、腰へ廻る、此時、只腫れ、腹、鼓の如く、喘息して苦痛に堪へず、百薬効を得ず、終に胸膈をせめ、心をつき息絶るに至る、此症を受たるもの、(此症は生ずる事を待たず)生る事を得ず、漸、死を免るもの、(此症は生ずる事を待たず)百に壹・貳人なり、末期まで正氣にして只日を数へ、時を推て死を待つ、盛壯剛健の者も死し、老少虚弱の者に又此病を受さるものあり、医者に是を問へハ、其症、本朝の浮腫・脚気腫に違ふ事なし、故に其妙薬、靈方を投するに百万其驗なし、強寒陰湿の地、薬性、其功を失ふにや、又其症見る処に違ふ事有て然るや、其所以を知らずとなり、クナシリ嶺、南部侯の戊卒、又同症にして毎歳多く死亡す、只違ふ処は其病きざすの時、体中に赤斑を生し、(此斑は毒なり)是を切破りて血をとり、後、良薬を施すに其効しなき事、エトロフに同しとなり、往古吾朝に瘡瘡なく今の夷と同しかりしに、一歳

此病流行して、上、王侯より、下、庶人・乞食に至るまで此病を受けるもの、医薬其功を得ず、枕を並へて死亡し日本殆んど人種を絶んとするに至りしかや、其節、良医なきにしも非るべけれども、各其病を愈す事能ハさりしハ其医の拙きにもあらず、其方を得ざる故ならん、後ち異国より痲疹を療するの方書渡来してより、功拙となく是を療治するに過つ事なきは、是病と方と相応すれハ也、エトロフの奇症又然り、若し良薬あつて其病に応ずるの方を製して是を施し、(弘北地誌)戍卒病難を免れ、万世此沢を蒙る事あらハ、誠に国家の大幸ならん

一、天文の趣きあり、雲氣を考ヘヲロシヤ人の来るへきを知り、(弘北地誌)海上風波によつて倭国より貴人渡来すへきと占ひ、星象を見て変災の有へきを云、狐の声を聞て吉凶を云の類也

一、呪咀と薬の事あり、禁厭(マナヒ)の事は巫様の事あつて疾病災妖ノ事ある時はを頼みて法を修し祈禱する事有とぞ、薬は病ある時採薬して是を療すと云とも秘して人に伝へず、既毒矢の法あるなれハ、又病を愈す良薬もあらんかし、日本記ニ天神以大占ト之(弘北地誌)、又神代の占は鹿の肩の骨をぬきて占ふよし亀兆伝に見へ、異朝に阿図洛書あり、薬の事ハ神代、大己貴命、少彦名命と心を合せ、(弘北地誌)天下蒼生の為に病を療する方を定め、又禁厭の法を定め百姓悉く恩頼を蒙る事見ゆ、神農百艸を嘗むる事等、史に粲然たり

一、夷に年月日時なしと云へり、尤己れか年齢を知らねはなきか如しと云へとも、予、夷を集めて其咄を聞に、年号干支なけれども、四季分れり、又十二月等の如く其節々細かに名あり、予、夷言に疎く詞を悉く聞取事あたハす、故に其曆数の模様有事を粗爰に記す

夷言

今歳タンハ、去々年(弘北地誌)シヤク子、去年ホシカイシヤク子、来歳ヲヤハ、今日タンハ、一昨日ホシカラマン、昨(弘北地誌)ラマン、明日ニシヤツタ、明後日ヲヤイシンケ、春バイカラ、夏シヤウケ、秋チユツ、冬マタ(弘北地誌)、朝クウ子、昼トノシケ、タヲノマ、夜シリクン子、日チユツ(弘北地誌)フカムイ、月クン子チユツフ、星リイコツハ、東ヲチツフ、西マキチウ、南シユノ、北マカレル、水ワツカ又ヘ、火アベ、木ニ、金カンガ子、夷に金ナナル、土ドイ、山キシタ、川ベツ、海アドヘ、雨コアンベ、雪ウハシ、水コレル、雲ニシ、霰カウ(弘北地誌)、霧ウラリ、風シウ、雷カモイ(弘北地誌)フシ、電シリカムイ、時雨コル、虹ヤヨチ(弘北地誌)、石ボイナ、砂ヲグ、澗トマリ、入輪(弘北地誌)モイ、崎シレット、沼トウ、滝ピン子、道路ル、波コヘギ、汐チウ、塩シユツフ、堅雪ウガ、温泉セ、ギ、湯セ、ツカ等の類也、又人倫の名は夷アイノ、男ヲツカイ、女メノコ、祖父エガシ、祖母ヲチ、父アチャ、母ハボ、兄ユビ、姉シヤア、弟アギ、妹トレシ、老人チャ(弘北地誌)、老母バツコ、夫ホグ、妻シヨカラマチ、妾イドシマチ、男子セカチ、女子カナチ、孩児ボンシヨ等各分れり、支体は首レグチ、顔ナヌ、耳キザラ、髪ホトビ、眼シギ、鼻エド、口チャロ、髭レキ、眉ラリノマ、齒イマケ、頤ノツケウヘ、額ヲブトル、舌アウ、唇チャブシ、腹ホニ、乳トガブ、臍ハンコブイ、手バララギ、腕タビシト、指アシケベチ、爪アム、肩ハリキシヤム、胸レラル、膝クシ、バ、腰セレキ、足ケマ、臍毛ケチヌマ、背セトル、陽チエ、陰チ、糞バツタリ、小便ヲゴイマ、此外万物の区々なる言語の多なる挙て尽すへ

からず、尤、詞は一国一郷一村限の言あり、全く吾聞る所の是なりとするにあらず、和漢、郷語方言の違ひあり、只好事家の為、其一・二をあく、其狭きは赦し給へ

一、源廷尉義経、蝦夷か嵐へ渡り給ひし事、夷共の伝説有て淨瑠璃の如く節を付て是を語る、是をジャルハウシと云、物語と糺釈す、公をバシ、ヤムホウクハン、又アイノラツコ又ヲキクルメとも称し、弁慶をシヤマヘグルと呼ふ、是を信する事、甚だ厚く、吾朝太神宮を祭か如し、酒を呑にも必ず公へ捧げ、^三卒て吞と云へり、此嵐の奥にヲトイマウシといふ所に義経の馬踏石ありて旧跡とす、其外高山の内、所々に古跡ありとぞ、公ハ天下の英雄たりしに、幕府頼朝の為に其才を忘れ、終に本朝におゐて素懷を遂る事能ハす、蝦夷か島へ渡り靺鞨国を過ぎ、金の代、異朝に入るとなり、金史に倭人義行と云者有しか、卒伍の中に有といへとも、勇悍、衆に超越し度々戦功有て將に登庸せられしか、武勇謀略三軍に冠たり、功を累ね擢てられて大將軍に位し、後に大國の諸侯王に封せられし事見へたり、此義行は必ず廷尉なるへし、其故は公、平家追討の功によつて伊予守に任し檢非違使の尉に叙せられ昇殿有し砌、公家に又良経といふ人有、文字不同といへとも訓同き故、義経を義行に改名せし事、諸書に見へたり、惜むへし、良將、小人の讒に身を沈め、本朝におゐて素懷を遂給ハす、異域望郷の鬼となる事、豈嘆息すへからざらんや、靺鞨国の事は中朝事実註に曰、渤海者本粟末靺鞨附^{〔高麗者也、姓大氏、地方五千里、戸十萬戸、唐睿宗先天中遣使為渤海郡王、自是始去靺鞨号云々、然れハ高麗の隣国にして}

今は中華に属せりと見ゆ也

エトロフより海上七里を隔て、丑寅に当てウルツフといふ嶋あり、この嵐、ヨロシヤの属島なるにや、シレイダとかや言しヨロシヤ人家内十人計り、寛政年中の頃より文化二年まで住しと也、近藤十蔵なるもの、此嵐へ渡る時、此事を聞、シベトロの夷を案内通辞とし彼の嶋へ趣き、近くなりて船中より鳥銃を打しかバ、彼方にも同く打合す、是此方にて鳥銃をハ打払ひ玉はなしと云事にて、彼も同く打払ひ疑心なしと云事をし彼国の礼也とぞ、是より上陸し、通辞を以て、日本の官人來りし事を伸しかバ、シレイタ、家の内に残らす緋毛氈を敷渡し、衣服を改め迎に出たり、十蔵より幣物として酒十樽と米、紅花染の木綿等を送しかハ、殊の外悦び、二、三日逗留して物語せしとぞ、此者元ヨロシヤの官人にて高貴の者なるか、罪有て此嵐へ流罪せられ此所に住事十年に及へりと也、迎も本国へ帰へき身にあらす、幸ひに吾并に僕従等鉄炮を造事を知たれハ、願くハ公の恵を以て倭国へ渡り日本の民たらんと只管願しか共、十蔵疑て許容せず、帰るに及んでシレイダより十蔵へ玉、織物の類、答札せしとかや、文化二年までハ住居せしか、同三年、夷を遣して見せしに彼者病死して奴僕等は本国へ引取しにや、家のミ残りて人はなく、家の後ろへ高く土を築上げ、塔を建、側に八角なる卒都婆の如きを建置たりとぞ、此ウルツフより東北、ヨロシヤの方へ庭前踏石の如く、或は五里、或は十里を隔て、ヤシゲチリボイ、レフンチリボイ、マカンル、シムシリ、ケトイ、ウセシリ、ラシヨソ等の嵐々、式十三嵐続きて、其内夷の住む嶋もあり、又無人嵐もあるとぞ、是を夷か千嶋とも云へし、此内嶋の子をかくす嶋有て、其卵夥敷あつて夷の食料とするとなり、式十四嵐目はヨロシヤ国にして、エトロフより海上大凡百五十里程にして

カムサツカといふ大湊に至る、此処は日本長崎の如く西南の国々へ商船を出し、又外国の商舟の入津する大都会にして、甚だ繁華の地也と云へり、カムサツカ、肉干場ニクホシバと翻譯す（亂れ、エツノコトハとらじ）、夷言也、ヲロシヤ、夷言をするや、夷又ヲロシヤ言を用るか知らず、エトロフより本朝津輕へ三百有余里、ヲロシヤへ漸く百五十里計也、其近事知るへし、ヲロシヤ国の盛んなる、武備委くして既に隣国なる控葛爾と云大国へ切り入り、又清朝へも攻入たりし事、西域聞見録に見へたれハ是に略す、其外、夷とヲロシヤの事共は見聞せし珍説もあれと、余りにかた／＼しけれハ、爰に筆を留す

文化六（一八二九）己年孟夏

東奥合浦隱士

櫟齊山人記之



「（一八二九）時、（一八二九）安政六己未年

十月廿一日写終

源次泰
「

（なみかわ・けんじ 鴻巣市史編さん室）